

# 中国におけるウイルスフリー種いもの普及に関する研究

共生基盤学専攻 共生農業資源経済学講座 開発経済学 繆 健茹

## 1. はじめに

中国は世界一の馬鈴薯生産国であり、増え続ける食料需要に対応するため馬鈴薯を米、小麦、トウモロコシに次ぐ第4の主食作物として位置付けている。しかし馬鈴薯の単収は他の主要生産国と比べ低くその要因としてウイルスフリーの種いもの普及が進んでいないことが指摘されている。よってウイルスフリーの種いもの普及が重要となる。本研究では馬鈴薯主産地である甘粛省、定西市に属する2つの村を事例として、ウイルスフリー種いもの普及の実態とその要因を明らかにする。

## 2. 方法

甘粛省中部に位置する定西市は、黄土高原地帯の一部である。標高は1,800mから2,400m、年間降水量は386mmから560mmであり半乾燥地帯である。予備調査より調査地はウイルスフリー種いもの普及が進んでいる大坪村と普及が停滞している三源村を選定した。大坪村は定西市市街地から5km、三源村は75kmに位置している。ウイルスフリー種いもの普及が進んでいる大坪村より20戸、普及が停滞している三源村より50戸の農家を無作為抽出し、農家調査を行った。三源村の農家戸数が多い理由は普及の停滞要因を詳細に明らかにするためである。

## 3. 結果と考察

調査の結果、馬鈴薯作付面積におけるウイルスフリー種いもの更新率は大坪村では64%であるのに対し三源村では8%であった。中国政府は村民委員会を通しウイルスフリー種いもの購入額の半額を補助する政策を実施している。大坪村では農家が村民委員会からウイルスフリー種いものを購入した場合、価格が市場価格の半分になる。また農業資材店で購入した場合でも年度末に購入額の半額が補助される。一方、三源村では村民委員会からウイルスフリー種いものを購入した場合でも価格は農業資材店で購入した場合と差はなく、大坪村のように年度末に補助金が支給される制度も存在しない。したがって両村では補助金制度への対応に違いがあった。また三源村ではウイルスフリー種いもの更新を行っていない農家のうち約60%の農家がそもそもウイルスフリー種いもの導入による単収増加の効果を知らず、情報の周知が進んでいない。さらにウイルスフリー種いもの圃場と非ウイルスフリー種いもの圃場の単収を比較したところ大坪村では2.4倍高いのに対して、三源村では差はみられなかった。三源村の農家はウイルスフリー種いもの品質の低さを問題点として挙げており、これがウイルスフリー種いもの導入を妨げる一因になっていると考えられる。

## 4. まとめ

本研究では、中国国内の馬鈴薯主産地である定西市内の2村を対象に、ウイルスフリー種いもの普及の実態とその要因を明らかにした。普及の停滞要因として、①補助金制度への未対応、②効果に対する知識の不足、③種いもの品質の低さの3点が挙げられる。今後、補助金制度やウイルスフリー種いもの効果に関する知識を周知させることが望まれる。